

力が低下してきているのではないかと  
思い、例を蚤にとつて考えてみました。

二年生に蚤の絵を書かせてみると、  
正確に写生できるのは、クラスに数人  
でした。足の数を多く書く者、節の数  
を少く書く者、紋の位置を別の場所に  
書く者など多種多様、中にはこれでも  
蚤かと首をかしげたくなる者もいます。

もう一例、バインダーのピンがはず  
れますと、もちろん機械は動かなくな  
ります。しかし生徒はそのまま休憩、  
どうしたと言うとピンがはずれたのだ  
から仕方がないと言います。

機械が変になった位置から現在地ま  
でたかだか三メートル程度、この三メ  
ートルを捜せばよいものを捜さないの  
です。これは怠けているのではなく、  
どうも彼には捜すということが頭にう  
かばない。すなわち、なおそうとする  
気力がありません。

このような生徒に興味をもたせ、な  
おかつ理解させるには、ただ生徒が悪い  
悪いとばかりばやいていても、解決  
にならないのではないのでしょうか。

本校では、三年生になると専攻学習  
というのをやります。これは教師の指  
導があるとはいえ、自ら計画し、実験  
をし、その結果を論文にまとめて卒業  
前に提出するのです。

この専攻学習を指導してみると、こ  
れが二年生の時教師の頭を悩ませた生  
徒かと思う時があります。計量器を操  
作し、薬品を計り、下級生を指示し実  
験を進めていく。なかには夏季休業中

自主的にほとんど毎日出校して調査し、  
夕方遅くまで残って実験していく生徒  
もいます。

このような事例をみてみると、実験  
実習を伴う農業学習は生徒の興味と意  
欲を高めるものであり、教える側の学  
習の指導方法のあり方がいかに重要で  
あるかがわかる。

十八年間、生徒は変わったといいな  
がら、興味をもつものについては一生  
懸命に取り組み、理解もします。

このことは一貫して変わっていないよ  
うに思います。それよりも私自身頭の中  
で考え、口先だけで机上の難しい事  
を教えていたのではなかっただろうかと  
この三年生の専攻学習の取り組みか  
たをみて反省しているこのごろです。

(県立相馬農業高等学校教諭)

## 痛みを知る機械

森 紀子



中学校の養護教諭として二年目を迎

え、中学生という年代のむずかしさや  
すばらしさを、毎日のように感じてい  
るこのごろである。中学校の保健室は  
生徒の方から相談を持ちかけてきたり  
あるいは、なにげない話の中に心の悩  
みや心配ごとを打ち明けて行ったり、  
という点で、学校の中でも心の窓を開  
きやすい場所であるように思う。

保健室は、生徒の本音がよく聞ける  
場所だとおっしゃる先生方も多い。私  
も、そうかもしれないと思う。しかし、  
そういう場所であればあるほど、生徒  
の訴えを聞きながら、「本当はなんで  
保健室に来たのだろう。何を言いた  
いんだろう」と、より真実を知りたいと  
いう欲求も日増しに強くなってくる。

悩んだあげく、行きづまって相談に  
くる生徒の場合は、悩みも症状もはっ  
きりしているのだが、来室回数も少な  
く、訴えもはっきりしない不定愁訴の  
多い生徒の場合は、なかなか本当のこ  
とを知るのがむずかしい。突然、そう  
した生徒のひとりが、激しい腹痛を訴  
えて欠席が続いた。大きな病院で検査  
を受けても異常は見当たらないという  
休みが長びくにつれて、担任との話し  
合いの中で、「本当に痛いのであるう  
か」という疑問が出てきた。

この時、私は看護学生時代に、小児  
科の婦長がポツンと漏らした言葉を思  
い出した。それは、激しい腹痛を訴え  
薬を要求するが、粉ミルクを飲ませる  
とうそのようになおってしまう。しか  
し、それを飲まないと、午前四時から

十時までの間は激しく痛み、あとはう  
そのようになおってしまうという患者  
の看護をしていた折のことである。

「痛みを知る機械があつたらねえ」  
本当に、そういう機械があつたらな  
時々思う。生徒の言葉を信じないわけ  
ではないが、そうした言葉の裏にある  
ものを見過ごしていると、それこそ本  
当の痛みがわからないのである。この  
生徒の場合も、学校でいじめられるこ  
とが原因であつた。

中学生が巻き起こすいろいろなでき  
事は、未熟な私なるがゆえに、頭をか  
かえてしまうことも多いのである。保  
健室が、生徒のかかえる悩みを解決す  
るために、その糸口をつかむことの  
できる場所であるためには、生徒の訴え  
に、常に耳をかたむけなければなら  
ない。声にならない声も聞かなければ  
えがなんであるかを、いち早く知らな  
ければならない。

そんなことを考えていたある日、保  
健室で資料を捜していると、古い荷物  
の中から一枚の写真が出てきた。前任  
校の、むし歯のない児童たちである。  
ドラエモンメダルを首からさげてう  
れしげに笑っている。この子たちも、  
今は中学生である。ドラエモンメダ  
ルなど喜ばないだろうと思いつながら、  
ふと、私もドラエモンのように、ポケ  
ットの中からいろんな機械が出せたら  
な、と思つた。

(二本松市立第二中学校養護教諭)